

独歩における浪漫主義

——その二元的構造について——

一

「我等が選ぶ可きは二者の一のみ。曰く天地に大道存し、大道は神より出で、人は之を信じて、愛と美とを永久の真と信ずること。曰く天地はたゞ盲動の暗黒のみ、人は愚と悪との肉塊のみ、……。

此二者のみ、光若くば暗、されど奇怪なるは我等が心の立場なり。二者の一をも信ずる能はず。確信する能はず。」

独歩『悪魔』(明・36)中の一節である。この部分を引用して、勝本清一郎氏は、『座談会 明治文学史』の中で次のように言われている。「この懐疑なんですね。これが独歩の文学のいちばんの主題だと思ふのです。独歩の文学は結局、独歩の思索力の停滞の上に成立しているんです。そしてその停滞の根元に自分の出生に関する問題があるわけです。」

水 上 勲

独歩の文章に度々見られるこうした二元的分裂、または「懐疑」に、独歩文学の主題を見ようとする勝本氏の意見には賛意を表したい。しかし、さらに、ここから出生の問題をからませて、独歩の思索力の停滞を云々されるのは如何なるものであろうか。

むしろ、この独歩の、正直な、ありのままの告白(むろん『悪魔』の主人公は作者自身ではないが、この思想そのものは独歩自身のものに他ならない)にこそ、彼のいわゆる「シンセリテイ」を見るべきではないか。ここで独歩の語っている思想には、軽々に見すこせない本質的な問題がはらまれている。

独歩の場合、よく知られているように、人は「地上感染の衣」によって真実を見る眼がおおわれており、その慣習の衣をぬぎすてることにより、この天地間に直接己れを接し、そこに自由美妙神聖なる霊的存在を実感し、「神、自然、人性」を一貫する美しい調和を

つくりだす、という汎神的基督教的な理想主義が強く存在していた。こうした理想を形成するにあたって、その要因をなした主要な契機が、基督教との接触や、カーライル、ワーズワース、エマーソンなどの西欧文学から受けた刺激であったことは言うまでもない。独歩の精神形成の記録たる『欺かざるの記』を一読すれば、独歩がいかに真剣に、誠実に、このような理想主義的浪漫精神を確立しようとして悪戦苦闘したか、明らかである。

しかるに、ここで独歩はついにその理想主義を貫きえなかったことを、おのずから告白しているのである。熱烈に「神」を信じ、愛や美や自由を望みながら、彼は一方でまた、天地を「盲動暗黒」とみる冷徹な知的現実的判断を否定しきれなかった。中途半端といえどもそれまでだが、こうした二元的分裂、動揺それこそが独歩の内面の実相だったのであり、また、その分裂を意識しつつ、その統一と調和をはかりたい、というのが、独歩の何よりも最大の願望だったのである。

独歩文学のこのような二元的把握は、夙に様々な人々によって行われてきていることである。特に、芥川龍之介の次の文は、やはり大変示唆的である。^③

「しかし更に独歩を見れば、彼は鋭い頭腦の為に地上を見ずにはゐられないながら、やはり柔かい心臓の為に天上を見ずにもゐられ

なかった。(中略)自然主義者も、人道主義者も、独歩を愛したのは偶然ではない。」(傍点筆者)。

独歩文学を正確に把握するためには、この二つの側面——「天」と「地」にかかわる——を統一的にとらえる必要がある、と私には思われる。従来、(吉江番松『国木田独歩研究』^④以来)、独歩文学を、浪漫主義から自然主義的リアリズムへ、という推移転換においてとらえる理解が一般的であったが、独歩にはかなり早くから、両方の傾向が同時に存在して、様々な形で表現されていることを、私は指摘しておきたい。そこに「明治の児」としての独歩の特性を見ることのできるのではないか。

一一

若き独歩の理想とした所は、先にも少し触れたように、現実社会の「習俗猥感」よりのがれ、「シンセリテイ」をもって、「天地自然」と「面フェイス・スツェツと面フェイス」とを相接し、そこに「自然の児」「神の子」としての自己の存在を痛切に実感することにあつた。

青年独歩においては、「自然」は「神」の力の表現(カーライル)であり、神聖にして犯しがたい莊嚴性、神秘性をはらむ存在であった。「神の子」たることは、即ち「天地の子」たることであり、「天地の子」たることによって、人はこの現世社会の習慣的的生命からの

がれ、自由にして美なる世界に生きることができるのである。このように、独歩における「天地自然」は、そのまま「神」と置きかえ得る存在にはかならなかつたのだが、しかしまた、独歩の半面は、このような理想化された「自然」とは逆の一面を敏感にとらえていたことを見逃すわけにはいかない。独歩において「自然」は明らかに二つの異なつた貌を見せている。一つは、前述の如く、理想的な神の表象としての自然であり、今一つは、暗く怖るべき力を持つ、虚無としての自然である。

この両者の間にたえず動揺する独歩の姿を、私達は『欺かざるの記』の至る所に見出すことができる。その基督教的理想主義にもかかわらず、独歩にとつての「自然」は、ともすればそれを裏切つて、「冷々然、黙々乎」とした、「悠久として無限」である巨大な虚無として、彼の前に立ちあらわれる。^⑥

独歩はそこに恐怖を感じ、(「此の怖しき流動、呼吸、変化を保つ自然の中に吾の介立するを思へば実に慄然たらずんばあらず。」26・10・4) また、「名づけ難き幽愁」「言ふ可からざる暗愁」を感じる。

(「大山高岳に登り、人叢を脱して親しく無言漠々なる自然と面々相接する時は余は実に言ふ可からざる暗愁を催すなり。昨日も又其の如し。余はウォーズワースの詩想に由つて、自然と人生の調和を得たることを信ず、而も此の暗愁は容易に払ふ可からざるは何ぞ

や。」26・10・9)

さらに『信仰生命』や『苦悶の叫』などという後の評論にも、同じような感想がくりかえし語られている。西欧の基督教の伝統を有しえない我国において、「自然」がこのように、流動し、全てを呑みこむ巨大な無として実感されたのは、むしろ必然的であつた。独歩はこうして、一方では「自然」に神の光を求めつつ、他方では「自然」の怖るべき力——その前での人間の卑小な無力さに直面する。こうした独歩の自然把握に、その浪漫的志向と、それにも拘らず存在する動かしがたい現実的感覚を私達は見出し得るのである。

しかし、独歩がいつまでもこのような自然の虚無の前に立ちすくみ、ただ停滞するしかなかつたというのは、決して当を得たものではない。くりかえし言えば、独歩の願望は、この理想と現実との二元的分裂を、どうかして調和させたいという所にこそあつた。自然と人生とは、ワーズワース詩中の人物たちの如く、調和されていなければならぬ。彼の理想においては、「神、自然、人性」の三者は互いに切り離しがたく結びついていた。汎神的自然観の、それが特徴であつた。^⑦ 事実、独歩は、佐伯時代においては、そのような調和を見出し得たのである。

「夜。観察の爲め、独り散歩す。(中略)此のさびしき市街!

ウォーズワースが村落を見たる同情を以て観せしめよ。意味深き物語なからめや。(中略)かのかじや。かのをけや。かのこつじき。彼の小供等。彼の理髮所。彼の井戸、豈に意味深き物語なしとせんや。記憶せよ。皆な天地間に存し、此自然の中に起る事実なり。高き処より見下せ。』(26・11・4)

「十二段より帰路、又た河船に乗る、船頭只だ吾等兩人の爲めに船を行る、……吾此老人を忘るゝ能はず。何となれば彼を一個のソールとして天地間に於ける人間の生涯となせば也。此老翁の一生と雖も、必ず深き物語あること必せり。』(26・11・7)

このように、地上の實在の人物の上に、「一個のソール」を見る発想に、やはり独歩のすぐれた現実的感覚がうかがわれる。芥川の言うとおり、まさに独歩は「天」を仰ぎつつ、「地」にむかう。地の生命に対する彼の愛着は、ひじょうに強く深いものがあつたのである。

その際、独歩が特に注意をひかれたのが、老人とか乞食とか、世間から忘れられたような「小民」であつたことは良く知られている。その人々は、かならずしもワーズワース詩中の人物(たとえば「マイケル」)のように、確固たる信仰に立って人生の悲劇に耐えるような、強い信念を持った人々ではない。むしろ、人生の敗北者、敗残者といへべき人々である。独歩が、その観念的な基督教的理想

主義から、このように忘れられた「小民」の現実的存在にひきつけられていった時、やがて独歩の文学的開花が約束されるに至るのである。

三

独歩の自然文学の代表的作品が『武蔵野』(明・31)であることは、改めて言うまでもないところだろう。処女作『源おぢ』(明・30)を経て、翌年には『武蔵野』はじめ、『忘れえぬ人々』『死』『少女』『河霧』『鹿狩』などの初期作品が次々と生まれ、小説家としての独歩が誕生する。

これらの初期小説において、自然はどのように扱えられ、描かれたか、まず『武蔵野』を中心に考察を加えてみたい。

この、小説とも随筆とも記録ともつかぬ作品が、その後独歩の名を高からしめ、多くの人々に読みつがれてきたのは何故であろうか。自然文学としてのその魅力はどこにあるのだろうか。

その描き方から先に言えば、それは五感に触れ、感じたことの実際を、ありのままに描くという方法をとっている。こうした「実感」描写が、読者に、武蔵野の自然の清新な印象を強く感じさせるのである。

よく知られている通り、『武蔵野』は二葉亭訳になる『あひびき』

の強い影響下に書かれている。彼がそこから学んだものが、微細な自然風景の実感的描写なのであった。彼自身、「自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至ったのは、此（『あひびき』をさす）微妙な叙景の筆の力が多い。」と記している通りである。

前半部において、櫛の類の落葉林の、秋の末から冬にかけての情景が描かれているが、それはもっぱら作者の五感に映ずるものを描くといふかたちをとっている。なかでも、彼の耳がききわけける微妙な様々の音、鳥の羽音、虫の音、空車の響き、馬の蹄が落葉を蹴散らす音、村の人のだみ声、銃銃声、栗の落ちる音、ささやくような時雨の音……など、きわめて実感的に写生されている。

こうした独歩の描写法が、当時としてはいかにすぐれたものであったか、それを見るには、同時期にやはり自然文学として名を馳せた、徳富蘆花の『自然と人生』（明・33）と比較してみるのが良いだろう。

その中の一節、武蔵野を描いた「雑木林」（『自然に対する五分時』）の一部を引用してみる。

「木は檜、櫟、榛、栗、榎など、猶多かるべし。大木稀れにして、多くは切株より簇生せる若木なり。（中略）霜落ちて、大根ひく頃は、一林の黄葉錦してまた楓林を羨まず。其葉落ち尽して、寒林の千万枝簇々として寒空を刺すも可、日落ちて煙地に満ち、林梢の空薄

紫になりたるに、大月盆の如く出でたる、尤も可。」

僅かこれだけの引用でも、両者の文体の相異は明らかである。蘆花の文章には、漢文脈から来る類型的な言辭が多く、比喩、擬人化が多用されている——そこに蘆花独特の自然観がうかがわれるが、ここでは触れることはできない——ため、それほど清新な印象を与えない。これに較べれば、独歩の文章は自然の与えるしみじみとした情感を写実的に良くうつしているといえよう。ここに『武蔵野』の魅力の一つの要因がある。

しかし、この作品が、読者になじみやすく、広く読まれてきた原因として、その自然の把握の仕方が日常的で現世的であること、いいかえれば、身近かな、誰でも触れることのできる自然がそこでは描かれているということが、さらに指摘されなければならない。

地勢的特色からみても、彼の好んだ武蔵野は、まさに東京の「郊外」に位置し、ちょうど「都」と「自然」の接点にあっていた。

それが独歩の詩興を呼びおこす要因であったことは、彼自身の記している所でもある。独歩はそこに「一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る」姿を見出す。何故このような光景にひかれるのか、といえば、その光景が「何となく人をして社会といふものの縮図でも見るやうな思」をさせるからである。ここでは、自然と人々の生活とは互いに密着し、その有様が独歩をひきつける

のである。

「野やら林やら、ただ乱雑に入り組んで居て、……それ又た実に武蔵野に一種の特色を与へて居て、ここに自然あり、ここに生活あり、北海道の様な自然そのままの大原野大森林とは異なつて居て、其趣も特異である。」林と野とが斯くも能く入り乱れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る処が何処にあるか。」(傍点筆者)

ここに見られる自然は、まさに人間的な、現世的な自然であつて、抽象化された理想的觀念としての自然ではない。このような人懐しい、ごく身近かな、誰にでも経験しうるような自然に、「永遠の呼吸」を見出し、神聖なるものの息吹きを感ずること、そこに『武蔵野』のもつ魅力の秘密がある。

このような意味での「自然」は、他の初期作品——『源おち』『忘れえぬ人々』『河霧』などにも共通してみられるものである。これらの作品においては、「自然」は登場人物たち——多くは人生に傷つた敗残者や、忘れられたような小民である——の背後にあつて、彼等の現世的な、あまりにも現世的な惨めな生活を支え、そこに救済の光を投げかけている。そこで自然と人々とは一体と化し、人生の敗残者や、忘れられた小民たちは、その故にこそ「天地の子」たり得ている。実人生における挫折の代償として、「自然」が新たな意義をおびてくるのである。

独歩における浪漫主義

たとえば、処女作である『源おち』において、ここに見られる主題は、確かに人間的な愛情が遂に相手に通じえないという悲劇であり、独歩の信子を失つた痛切な悲しみが強く投影されていることは疑いない。しかし、紀州を失つた源おちの死が、そのみじめさ、絶望感にもかかわらず、自然より出でて自然へ帰つたというような安堵感を読者に与えるのは、やはりそこで自然が、源おちと共に喜び、共に悲しむような性質のものとして描かれているからである。

その調和的安定感に立って、独歩の筆は思うままに、佐伯の困寂な、ものさびた自然の風景を写生的に巧みに描いていく。

『河霧』における豊吉も、源おちや紀州と同じく、人生に疲れきつた「世外の人」である。二十年ぶりに尾羽うち枯らして故郷にまい戻つた豊吉を、周囲の人々はあたたかくむかえてくれるのだが、ある日突然、豊吉は何処ともなく河舟に乗り、霧と共に、永遠の彼方へ消え去ってゆく。その後姿には、悲劇的な印象はさほど感じられず、むしろやつと人生の重荷から解放されたというような安堵感が漂っているのである。

しかし、その自然の写生の見事さと、「詩趣」において、際立つてすぐれた作品は、やはり『忘れえぬ人々』であろう。瀬戸内の小島の漁夫、阿蘇山麓で出会つた屈強な馬子、三津浜の雑踏の中の琵琶僧、いずれも自然そのままの存在といつてよい人々であり、「山

林海浜の「小民」にほかならない。これらの人々が、それをとり巻く自然と共に、みごとに描き出されている。

これらの初期作品において、独歩の持つ浪漫性と現実性とはたくみに調和され、きわめて現世的な「小民」の姿に、神秘的な永遠性が託され、そこに一種独特の詩趣が漂っているのである。

このように、初期作品において、独歩は自からその二元的分裂を克服し、現世的日常生活のうちに自然と人生との調和感を見出し、（それは必ずしもワーズワース的な信仰性をおびてはいないが、神秘的な永遠性は有している。）清新な実感的描写によって自然の新たな詩趣を表現することに成功したといえる。

しかし、このような調和的自然観が彼の内に成立しえたのは、あまりに短かい期間でしかなかった。この後の約三年ほどの間、独歩は報知新聞記者、ついで民声新報記者と新聞界入りを果たし、西園寺公望との交際や、有名な星亨との政治的提携をはかり、身を激しい名利競争のただなかに置かんとする。この間、『牛肉と馬鈴薯』などの作品を除けば、作品の数は少なく、三五年二月、鎌倉へ去ってから再び本格的な作家活動が始められることとなる。しかし、この後の彼の作品には、もはや初期作品にみられたような自然との調和感は見られなくなってしまっているのである。

四

独歩の初期作品に見られた、自然との調和、一体化というイメージは、やがて崩壊せざるを得なかったことは、既述したとおりである。その崩壊の原因の一として、『忘れえぬ人々』の中で、最も人口に膾炙された部分、大津の最後の告白を引用しておきたい。

「要するに僕は絶えず人生の問題に苦しむてゐながら又た自己將來の大望に庄せられて自分で苦しんでゐる不幸な男である。そこで僕は今夜のやうな晩に独り夜更で燈に向つてゐると此生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催ふして来る。その時僕の主我の角がぼきり折れて了つて、何んだか人懐かしくなつて来る。色々の古い事や友の上を考へだす。其時油然として僕の心に浮むて来るのは則ち此等の人々である。（中略）僕は其時ほど心の平穩を感ずることはない、其時ほど自由を感ずることはない、其時ほど名利競争の俗念消えて繪での物に対する同情の念の深い時はない。」

引用が長くなつたが、独歩もまたこの大津と同じ感想を抱いていたと言えよう。この告白部分に限っては、大津即独歩とみなしてよい。

ここで、その「小民」——自然と共にある——への愛は、「主我の角」がぼきりと折れた時に、油然として浮んでくるとされている

点に注意したい。この「主我の角」とは、生涯独歩を苦しみ続けた非合理的な衝迫、「功名心」を意味していたと言える。「自己将来の大望」というのがそれである。

「明治の児」として、独歩もまた当時の多くの青年と同じく、早くから熾烈な国家的政治的関心を抱いていた。少年の頃からナポレオン、豊太閤に心酔し、長じては『佳人之奇遇』『経国美談』に若き血をたぎらせ、吉田松陰以下教々の維新の志士を生んだ長州に育った独歩に、「霸氣縦横一世を圧倒するの快事」への憧れがないはずはなかった。

十九歳にして、彼は処女評論といってもいい文章『アンビション』（明・22）を、『女学雑誌』に投稿しているが、基督教にふれたばかりの彼にとっては、自己内面の悪として、まずこの「アンビション」が意識されていたのである。この後にも、独歩は何度も挫折、反省をくりかえしながら、なおその野心、功名心は断ちきりがたいものがあった。

こうした激しい焦燥に駆られていた独歩であればこそ、飽くまでも蓋世の雄たんとする欲望からふと我にかえった時、いいかえれば自然の中に我を見出した時、功名にあせる気持とは逆に、世の中から忘れさられてしまった人々や、失意落魄の人々に、いい知れぬシンパシーを感じ、またそのような人々の中に、自然との調和感を

見出したのであった。

しかし、独歩をその身内から焼きつくす炎は決して衰えたわけではない。ここでも独歩はまっぴらつに分裂している。「世外の人」へのシンパシーと、名利競争社会で激しく功名を競いあいたいという欲求。前者が独歩初期小説を生み出したとすれば、後者はそれを破壊する働きをした。後者にみられる積極性、活動性、「開化」性はある。このような二律背反が独歩をとらえる。それは彼の文学にどのような影響を与えたであろうか。はっきり言えることは、彼がもはや「自然」にその調和を求めなくなったということである。小説『帰去来』（明・34）では、『源おち』のように、人生の悲劇を自然が大きく包みこんでくれるような静穏さは見られない。そこに描かれている自然はむしろ冷淡でよそよそしい。

こうした自然との調和感の崩壊という地点から、独歩はどのような方向に進んでいったのか、中期の代表作『牛肉と馬鈴薯』（明・43）の検討を通じて、それを探ってみた。『牛肉と馬鈴薯』は、一種の思想小説であって、作者自身の思想がそこでもっとも直接的に語られていると思われる。

夙に指摘されているように、この小説の主人公たる岡本誠夫一人だけに、作者の分身が託されているわけではない。若い頃、北海道

に憧れて開拓に従事したものの、三月ともたないで逃げだしてしまつた経験を、露悪的に披露する上村や、また徹底して冷笑的でシニカルな態度をとり、岡本をのぞく他の全ての人々に対して痛烈な皮肉を投げつける近藤、いずれも独歩の分身といえる。

中でも注目される存在が近藤である。彼は、上村の挫折に対して、彼を「薄志弱行」とののしり、「詩人の墮落したのだ」ときびしく極め付け、そして、自分自身については、「君等は牛肉党なんだ、牛肉主義なんだ、僕のは牛肉が最初から嗜^すきなんだ、主義でも、ヘチマでもない！」と言う。始めから理想も幻想も見ない、徹底した現実主義者であることを彼は宣言しているのである。この近藤の言葉に「賛成ですなア」と応じる形で、岡本の議論が展開されることになるのだが、この二人の間に、不思議な共感の通じていることは、小説末尾の岡本の、「矢張り道楽でさア」という自嘲からも、またそう言う岡本の顔に「言ふ可からざる苦痛の色」を見てとるのが、他ならぬ近藤であることから、十分に察することができる。このことをまず明確にした上で、岡本誠夫について語る必要がある。岡本の抱く思想は、周知のとおり、「驚きたい！」という、一見奇矯な願望にあるのだが、このいわゆる「驚異の思想」について、私なりの分析を試みてみたい。

まず岡本は、これといった理想を奉ずることもできず、といって

世俗にまみれてこの現世の生に満足することもできない、と自分のことを語る。彼自身は理想家にも現実家にもなりきれない、と言うのである。このことは、これまで見てきたように、独歩における二元的分裂の投影と考えられよう。ついで独歩は、自らの恋愛体験をかなり美化した形で岡本に語らせている。(独歩の半面である女性不信、女性憎悪は、ここでは近藤に受けおわせられている。)

その上で、岡本は、これまで独歩が迎ってきた、或いは憧れてきた理想、願望——恋愛、政治、宗教、自然、科学、哲学等々——を次々と否定しながら、「喫^{ひく}驚^きしたいといふのが僕の願なんです。」と、ようやくその願いを皆の前に明らかにする。(ここでも、他の人々は「何だ！馬鹿々々しい！」「何のこった！」と軽蔑的に言うのに対し、一人「近藤のみは黙^{だま}言^まつて岡本の説明を待てるらしい。」と記されており、二人の間の暗黙の共感を暗示している。)

この岡本の、「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願」、「死の秘密を知りたいといふ願」ではなく、「死てふ事実」そのものに驚きたい、という願いには、どのような意味が含まれていると考えられるだろうか。それは或る面からみるならば、明らかに浪漫的な性質のものであると言える。綿貫の、「イクラでも君勝手に驚けば可いじゃあないか、何でもないことだ！」という嘲りに対し、岡本は「勝手に驚けとは至極面白

い言葉である、然し決して勝手に驚けないのです。」と答えて、我々の日常生活をいつのまにか形骸化し、生命の実感を失わせてしまふ「習慣」の怖るべき力を指摘する。

「如何にかして此古び果てた習慣の圧力から脱がれて、驚異の念を以て此宇宙に俯仰介立したいのです。——この岡本の願ひには、初めに指摘した『欺かざるの記』時代の汎神的基督教の浪漫主義の影響がはっきりと見られる。この習慣習俗に束縛された現世社会から脱離して、(岡本は「此使用ひ古るした葡萄のやうな眼球を削り出した」とも言っている。) 実存的な生命の充実感を天地宇宙間に見出したい、という願望は、まさしく浪漫的な心情が生み出したものと言えるであらう。

しかし、岡本のこの「驚きたい！」という願望には、浪漫的という言葉ではおおいきれない要素が一方に含まれているのである。「驚異の念を以て此宇宙に俯仰介立したいのです。」と岡本が言う時、彼は同時に「原因を虚偽に置きたくない。習慣の上に立つ遊戯的研究の上に前提を置きたくない。」と語り、月の光とか花の夕とか星の夜とかを云々する詩人について、「あれは道楽です。彼等は決して本物を見ては居ない、まぼろしを見て居るのです。習慣の眼が作る処のまぼろしを見て居るに過ぎません。」ときびしく批判する。ここで見られる限り、「驚きたい！」という岡本の切実な願ひは、

まぼろしを打ち破って真実を見つめたい、というリアリストイックな欲求そのものに等しい。そこに偶像破壊的なリアリズムの一面が明瞭にうかがわれるのである。

先に岡本と近藤との間に見られる共感について触れたが、岡本の彼に対する共感も、近藤の冷笑的なシニカルな態度に向けられていたのではなく、上村たちの「主義」という名の自己欺瞞に対する、近藤の強い反感、嫌悪に支えられている。近藤の発想の中にも、『現実暴露』的リアリズムの萌芽が存在していることを見逃してはならない。

二人は、まぼろしを打ち破って真実を見よ、という点において一致する。ただ、近藤はその結果としてシニズムに陥り、後の自然主義者の先駆的表現となつていたのであり、岡本は「驚きたい！」という主体的内面的感動に賭けようとする点で、近藤とは明らかに異なり、浪漫主義者としての片鱗を示しているのである。こうした岡本の姿勢が、このち必ずしも一般の自然主義文学者とは一致しえなかつた独歩の思想の根底に直結していることは言うまでもない。このような岡本誠夫像には、受動的な暴露的なリアリズムに満足しえず、主体の内部感情に即した生き生きとした感動をあくまで求めようとする、若々しい新鮮な息吹きが、いかにも「明治の児」らしい活気がうかがわれる。

岡本はまず始めに、自分は理想家でも現実家でもない、という意味のことを述べていた。その前提の上に築かれた、岡本の「驚異の思想」には、このように、その両者が統一された形で存在している。習慣のまぼろしを打ち破り、虚偽を排して、真実をこの天地間に見出し、そこに「驚異」を実感することによって生命の限りない充実感を味わうこと、こうした「驚異の思想」に、独歩における浪漫性と現実性との見事に調和された姿が見られると言える。

もちろん、ここにはある危うさ、脆弱さが見られない訳ではない。それはたえず、観念的理想主義におちいるか、さもなければ、現実暴露⁷的なリアリズムにおちいってしまうという危険をはらんでいる。実際、独歩初期の『欺かざるの記』（特に前編）には前者の傾向が強く、最後の『二老人』『窮死』『竹の木戸』などには後者の傾向が強く見られる。しかし、独歩の傑作といわれる諸作品『富岡先生』『春の鳥』『空知川の岸辺』『少年の悲哀』『号外』^④などでは、いずれもこうした浪漫性と現実性がたくみに調和され、そこに彼独特の、いわゆる独歩調が形成されている。

このように、独歩において、その二元的分裂は飽くまで統一され、調和されねばならぬ性質のものであった。そこに、彼の創造の力が、日本のいわゆる自然主義者とは異なる、その独自の創造性が働いていたと言えるのである。

〔註〕

① 同じような文章が他にも見られるが、さかのぼれば『欺かざるの記』に辿りつくことができる。一々引用は避けるが、同日記の明・27・2・12、同・6・4の記事等を参照。従って、小説『悪魔』が書かれた時点よりずっと以前から、独歩がこうした考えを持っていたと言える。

② 清水茂氏「独歩における二、三の問題」（昭・33・12『日本文学』）、相馬庸郎氏「欺かざるの記」前編研究（『日本自然主義論』昭・45所収）、笹淵友一氏「文学界とその時代下」（昭・35）中の「国木田独歩」など参照。

③ 芥川龍之介『文芸的な、あまりに文芸的な』（昭・2）

④ 新潮社『日本文学講座』十七卷、十八卷（昭・3）

⑤ 例えば、吉田精一氏『自然主義の研究上』（昭・30）などがその一例としてあげられよう。

⑥ このような独歩と自然の関係については、唐木順三氏「国木田独歩における自然について」（『現代日本文学序説』昭・7）参照。

⑦ これらの評論の原型は、『欺かざるの記』中の明・27・6・7の記事に見える「今井氏に与ふるの書」である。

⑧ 独歩における汎神論的自然観の特徴については、前出の笹淵友一氏論文を参照。そこで氏は、独歩にはワーズワースと異なる伝統的仏教的自然観の存することを指摘されている。

⑨ 中野好夫氏『蘆花徳富健次郎第二部』（昭・47）の第二章「自然と人生」を参照。氏は、『自然と人生』において、「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」との間の大きな差異を見出され、前者にあってはなお文語的美文調の色濃いことを指摘されている。

⑩ 「我は如何にして小説家となりしか」など参照。

⑪ 「唯暗を見る」(『独歩遺文』所収)

⑫ 佐藤勝氏「小説家の誕生」(日本文学研究資料叢書『自然主義文学』所収)参照。なお独歩の「予が作品と事実」に、「上村と近藤は余の或趣味を表はした想像人物である。」とある。

⑬ 「余と自然主義」「病床雑記」「不可思議なる大自然」などに明らかである。

⑭ たとえば、独歩の最高傑作と言われる『春の鳥』においても、単なる自然憧憬にとどまらず、リアリティックな眼の光っていることを、北野昭彦氏が克明に明らかにされている。『白痴讚美』のロマンチズムと『春の鳥』(『国木田独歩の文学』昭・49)参照。

△独歩の引用は学習研究社版全集に拠った。旧漢字体は新字体に改め、ルビは適宜省略した。▽